

### 「若宮賞受賞」

『若宮賞』とはなんだろう？と、通信編集係から若宮賞受賞式の原稿依頼を受けあわてて調べてみた。『若宮賞』とは「やまなし環境財団」設立の為に多額の私財を投じた故若宮氏を記念し設立された事業で、毎年県内の優れた環境活動をおこなっている個人・団体を表彰するものであることがわかった。その平成十九年度表彰式が去る一月二十六日、山梨県立文学館において「やまなし環境財団十周年記念行事」の一環で催された。

芦安ファンクラブは「登山者に対する自然保護への啓発やイベント開催、環境に配慮した山小屋経営、清掃活動などを通じ、南アルプスの自然や環境に貢献している」という功績が認められ他の四個人・八団体と共に選出され、当会を代表し宮下重晴さんが表彰を受けた。長年の地道な活動が認められた授賞式であり、会員のひとりとして誇らしく感じ、今後も微力であってもこの活動に協力していきたいと思えた場面であった。

その後十周年記念行事は、虫とりで有名な東京大学名誉教授、養老孟司氏による「地球環境問題、人類へ



の大きな壁」というテーマでの記念講演があった。養老孟司氏の話は人類史から山梨県生息の昆虫の話まで多岐に富み、私の知識ではとうてい消化できるものではないが、私なりの理解、受け止められた範囲で紹介してみた。

環境破壊の問題は人類の文明発展と背中合わせで進行してきた悩ましい問題である。例えば、世界四大文明の発祥地が今ではすべて砂漠や草

原地であり、人類が周辺にあった樹木をエネルギー消費してしまった跡である。CO2排出の問題も本来は各国が石油依存の消費生活から脱却しなければ好転は厳しいのだが、石油エネルギーと石油依存社会を構築・継続することで世界に君臨してきた大国や大企業の計算がそこにはあるだろう。そして、今のCO2排出の問題は地球温暖化と原因・結果のワンセットでの政治的キャンペーンが見え隠れする。

また、地球温暖化についても憂いている国ばかりではなく、むしろ喜んでいる国や企業もあるのが事実である。それぞれの立場や都合で思惑があるのだ。

もっと身近な別の例で言えば、昔に比べて生活環境から害虫がいなくなったことを環境が良くなったと観る人と環境が悪くなったと観る人がいるだろう。人によって違うのである。私たちは石油エネルギー依存の文明生活を享受しながらCO2排出削減を言わなければならない。



私は、講演テーマを養老孟司氏が「人類への大きな壁」としたのはCO2排出の問題が人類の外にあるのではなく、人類自身の内なる壁の問題であると言っていると受け止めた。

芦安ファンクラブ 杉山(弘)記

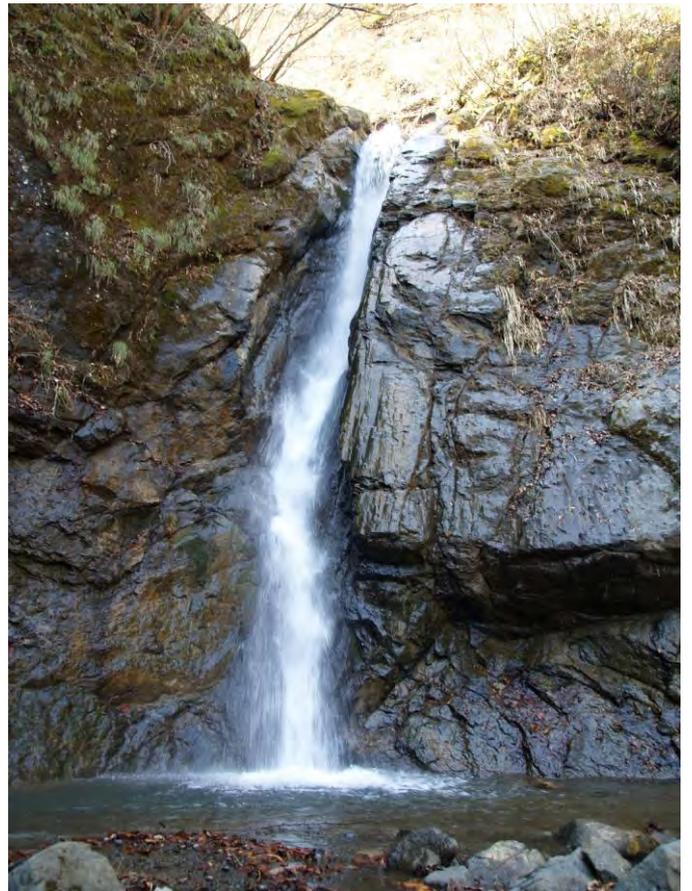
# 大柳川溪谷のガイドを終えて

阪急交通社が企画したツアー「大法師山公園のさくらと大柳川溪谷のハイキング」のガイドは、溪谷の新緑にはまだ程遠い三月十九日の下見から始まった。私自身、十谷集落の名前は聞いたことはあっても行くのは初めてである。しかし周囲を山に囲まれており、芦安にあらゆる面で類似していると思えば興味をもって参加した。下見には5人が参加し、十谷入り口から溪流公園で車を降りて溪谷に入った。竜門橋を皮切りに幾つものつり橋を渡り溪谷沿いに歩くコースだが、ツアー当日は二時間前後でバスに戻る設定なので、時計を見ながらの出発であった。途中からコースには設定されていない五段の滝の方まで足を運んだが、どの滝もそれぞれの趣を持っており、その素晴らしさに感動を覚えた。

天狗の大岩風呂を越え十谷荘まで来ると道が不明瞭になり、いったん林道に出て夕霧橋を目指した。



竜馬淵の滝



しぶきの滝

予定通りの時間で探索できる事を確認し、つきたべかんでこの地区の郷土料理である「みみ」の昼食をとり、帰路に着いた。

翌日の定例会で事務局が作成してくれた資料(虎の巻)をもらい一生懸命に覚えようと努力はしたが……。

個人的には二十九日・三十日の二日間参加したが二十九日の初陣のその日、バスは二時間以上も遅れて到着した。そのことを受け、翌日は集合時間を三十分遅らせて九時三十分とした。

翌三十日のツアーについて記してみたい。池袋・新宿発を始めるバス二台を受け持つ。ガイドは杉山氏、岩井女史と

私の三名で、予定どおり白根道の駅を集合出発し、五十二号線を余裕で南下する。しかし、なんと！鯉沢の塩の華駐車場にはもうツアーのバスが止まっているではないか。五開地区の「かじかの湯」を過ぎた頃、添乗員から出かける旨の電話があり、我々が駐車場についてまもなく最初のバスが到着してしまった。残りの2台も5分間核で到着してしまつたので、予定していた打ち合わせどころではない。自分達の身支度をやるのがやつとであるが、まだ、説明資料に一生懸命目を通す熱心なガイドさんもいた。添乗員との打ち合わせもそこで、タラの木、キウイフルーツ棚などの説明をしながら「ヒゴミズキ」が咲く溪流公園に下る。北岳・白根御池小屋のPRを含めた自己紹介(三十数名中、北岳に登った人は四名)、諸注意事項、ストレッチを済ませ十

数名毎に対応しているガイド風景



途中、観音橋手前の道上に古い建物の鉄骨の土台や焼け焦げた木材等があり、不自然極まり無いとのブーイング。源氏の湯手前で一人が大声を上げて立ち止まった。良く見るとヒキガエルが二匹、さらに水の中にはまだ卵あり、大多数の人が卵を見たのは初めてであった。その数メートル先には、蛙の石造がありこの地域は「非常に蛙が多くて昔より大切に見守

谷集落、大柳川、源氏山の名前の由来等を説明して出発する。

よく整備されたつり橋だが、もしものことを想定し、十数名ずつで渡るように指導し、途中では溪谷沿いに咲いているキブシ(うす黄色い穂を垂れる)や、いち早く春を告げるダンコウバイ(漢字では壇香梅、芦安ではズサと言う)、ミツマタ、イワヒバ(イワマツ)などの植物の説明をしながら溪谷沿いに歩を進める。

「ついでに、とサラリと交わした。更に源氏の湯の手前に数個のヒノキの輪切りがあり、それを指差して「天然のバームクーヘンだ」と言い子供のようにはしゃいでいる女性の参加者・・・実にうまい表現であり、我々の感覚との相違を感じた。林道に出てのんびり歩きながら今までの行った所の思い出、今から行く予定の旅などの話をしながら予定どおり、十二時十分にバスに戻った。皆さんの顔は満足そうに思えた。次の訪問地の大法師公園では二千本の満開の桜との感動の出会いが待っている。わずか2時間であったがこの出会いに感謝をしながらバスが見えなくなるまで手を振り見送った。

キブシ



ダンコウバイ

今回のツアーの反省点として、バスの到着時間が不規則であった。これは、都内の渋滞やバスの出発地点が異なることが起因していると思われる。参加者の客層は中高年が多くグループ参加が多かったため、まとまりがあり好感が持てた。先頭を歩いたため、説明が全員に行き届かず次回からは何か方策を考える必要がある。

る。ガイドが付いているという安心感が伝わってきた。今後このツアーが企画されたときはトイレ使用について、事前に「つくたべかん」に協力を願っておくほうが良いだろう。他のバスでは緊急で立ち寄ったグループは地元の特産品のおみやげを手にしていったという。少しでも地域に還元できればガイドとしてもうれしい限りだ。

ツアー参加者の声として、「素晴らしいので秋の紅葉の時期に来て見たい」、「滝を全部回ってみたい」、「丸太橋の頃来たが立派なつり橋になり驚いている」、「物知りですね、皆さんはガイド研修をどの位の頻度で実施しているのですか」、「ここを今度のツアーで初めて知った、地域の観光にもっと力を入れるべきだ」・・・などさまざま声が聞かれた。三月二十九日から八日間、バス十六台、延べ人数六百数十名に対応したツアーガイドが何とか無事終了することが出来た。

今回のガイドを通じて、改めて大柳川渓谷の素晴らしさや、十谷集落の歴史を知ることが出来た。都会からの参加者との触れ合いは有意義であり、貴重な経験への自身は参加者全員が実感していると思う。今後、このようなガイドの需要は増えることが予想される。会員全員が様々な知識と技術を習得し、切磋琢磨して、いつか来るであろう出番を待つ事とした。

芦安ファンクラブ 青木 記

## 第18回南アルプス芦安 親子参加歓迎 登山教室



「NPO芦安ファンクラブ」(代表 花岡利幸)では、「南アルプス芦安山岳館」との共催で春と秋の年2回、初心者のための登山教室を開催しています。登山教室では実践を通して安全で楽しい登山をする技術や、山の天気や地図の読み方などの登山に必要な知識を深めたり、動植物地形や地質、山の歴史などを学んでいます。今回の登山教室では、研修コース・登山コース・研修&登山コースの三つを用意し、気軽に参加していただけるよう計画しました。参加者はおひとりでもグループでも受け付けています。特に、ファミリーでの参加は大歓迎です。

- ◆申し込み、問い合わせ◆  
電話又はFAX、官製はがきでのいずれかで  
〒4000・〇二四一  
山梨県南アルプス市 芦安芦倉一五八九・八  
南アルプス芦安山岳館  
TEL 0555(288) 2125  
FAX 055(288) 2162
- ◎ 参加条件 健康で登山が可能な方
- ◎ 参加費
- ① 研修コース 大人/2,500円 (宿泊費は含まれていません)  
小人/無料
- ② 登山コース 大人/6,000円  
小人/4,000円 (宿泊費は含まれていません)
- ③ 研修&登山コース 大人/17,000円 小人/10,000円 (宿泊、食事、研修、移動費、保険料を含む) 予約金は不要ですが、③のコースについて最終/切後の欠席はキャンセル料5千円をいただきます。
- 小人/小学4年/6年生までの子供さんが対象で保護者同伴が必要です。
- ◎ 定員 50名(先着順)です。
- ◎ 最終/切平成20年5月15日

- ◎ 日時平成二十年五月二十四日(土) 午後十二時三〇〇〜五月二十五日(日) 午後十七時三〇〇
- ◎ 会場 研修場所 南アルプス市芦安「南アルプス芦安山岳館」
- ◎ 宿泊場所 芦安地内宿泊施設
- ◎ 研修
  - ・ 甘利山の歴史と自然 講演
  - ・ 甘利山南麓の変貌 講演
  - ・ 信玄公治水 現地研修
- ◎ 研修山名南甘利山(一、六五二m) 甘利山(一、七四五m) 大笹池 甘利山山頂から北には金峰山や八ヶ岳が高く見える。大笹池の神秘的な

- ① 住所、氏名、年齢、電話番号。
  - ② 登山経験のある方は「登った山の事など」
  - ③ 健康状態や気になる事
- 主催・NPO法人芦安ファンクラブ  
・ 南アルプス芦安山岳館  
後援：山梨県山岳連盟、日本高山植物保護協会(JAFPA)

## オーロラ AURORA 空間を支配する神秘的なベール

07年3月に夫婦で行ったアイスランドのオーロラハント旅行では、観測方法を知らない私達は夜中に時折夜空を見上げるだけで、一度もオーロラに出会えなかった。よくあるオーロラの写真はカメラのレンズを通して映し出された映像なので、絵葉書的イメージで出掛けても観ることは出来ないと、今回のツアーで思い知らされる。活発なオーロラ活動とは別に、人が肉眼で見えるのは白い帯状で、夜空に浮かぶ雲と違って判断できるようになるには、経験者の指導が必要となる。08年3月オーロラを観たいと再度の挑戦で「月刊天文ガイド」協賛のフェアバンクスオーロラ観望ツアーに参加した。



チェナ湖のオーロラ

地元穴山町在住で、天文写真家の牛山氏もガイド役で行くと言うので、観測が期待される旅行であった。3月7日成田を15:40分に出てシアトル・アンカレッジ・フェアバンクスへと乗り継いで、およそ14時間でベースとなるホテル着く、日本時間では翌日の早朝5時で現地時間では7日の午後4時半、食事なしのツアーなので途中のスーパーで買ったパンで夕食、これから4時間程仮眠の後、夜10時に観測に出発すると言うので寝不足と時差でクラクラする。フェアバンクス郊外の丘に建つ日本人経営の山小屋でオーロラの出現を待つ事になる、4月並みの気温とかで暖かく、夜中でも-5~6度位で積雪も50cm程度であった。私達7人の他に外国人の旅行者で20人程が、小屋のベランダや雪の丘に三脚を立て、それらしい白い帯状の雲に向かってシャッターを切る、数秒から十数秒の露光でデジタルカメラが捕えた緑白色の映像でオーロラの確認ができる、オーロラ予報も確立されており「あと1時間の間に活発になりそうです」と知らせてくれる。カメラを持っていない人は小屋の主人がベランダでオーロラをバックに人物を入れた写真を撮ってくれる一枚15ドルとのこと。こうして夜な夜なホテルから郊外のいくつかの観測地に出掛けて行くのを現地ツアー会社が請負い送迎をしている、終了はおおむね午前2時だが、私達のグループは帰りの道沿いでも撮影を行い、なかなかホテルに辿りつけなかったと、帰国後現地添乗員リコさんのメールに書かれていた。いまだかつてこんなに長時間夜空を眺めていた事の無い風邪気味の私は4日目をパスした。5晩の観測中で圧巻だったのは、チェナ湖でのオーロラでした、この日は天気図によると気圧

の谷で出発時から雲が多く、あきらめていましたが、凍結した湖上に張ったテントの中で歓談していると、北の空から雲が消え、肉眼でもそれと解る大きな緑の帯びから、やがて赤味がかかったカーテン状のオーロラが頭上に広がり、これがオーロラなんだと感動した瞬間でした。フェアバンクスに住み、ツアー会社を営む河内さんの好意で時間のゆとりが出来た事と、粘り勝ちだねと皆で喜び合った夜でした。また、空いている昼間にオプションで、マッキンリー山へのフライトや、エスキモーの村に郵便配達する軽飛行機に便乗し、北極圏を超えるツアーも楽しみ、北極圏越えの証明書が観光者に発行された。

「天文ガイド」編集長の計らいで、アラスカ大学国際北極圏研究センター所長の赤祖父俊一博士の講演も組み込まれていました、講義中だった合間に、火山灰から航空機を守るためのシステムをアラスカ大斎藤さんの通訳で、観測室の説明を受けたり、また大学内のマップオフィスでそれぞれ地図を買いました。

赤祖父先生の話によると、オーロラはローマ神話の曙の女神の名であること、佐久市に生まれた先生が、初めてオーロラと言う言葉を聞いたのは、子どもの頃母が好きで唄っていた歌詞に有ったと言う、講演用のノートパソコンからその曲を聞かせてくれた、古いレコードの音は、明治時代の歌劇の曲「さすらいの歌」だと言う。オーロラはスペースシャトルや人工衛星が飛ぶ超高層大気中の大電力の真空放電現象であり、オーロラの電力は太陽風の運動エネルギーが電気エネルギーに変換されて発生する、原子や分子が放電電流を運ぶ高速電子にぶつかられて発光する光であり、個々の原子、分子特有の光で、最も普通にみられる光は緑白色で、これは酸素原子の発光する光であるという。このほか北極圏の探検史やアラスカの自然について、アラスカに関わりのあったフランク安田の話などが、気候変動と地球の温暖化について先生は苦言を述べた。

最近氷河の末端が海に崩れ落ちてゆくのTVで放映し、CO<sub>2</sub>による地球温暖化のためとしているが、これは誤りであるという。温暖化の問題は簡単なものではない、CO<sub>2</sub>の影響は1/6で、5/6は自然変動によるものだという。地球温暖化が叫ばれる以前に、研究の必要性を感じた先生は、日米の協力により1999年アラスカ大学に、国際北極圏研究センターを設立した。4階建ての屋上にはレーダーなどの観測機器があり、建物の入り口には大きくSYUN-ICHI AKASO FU BILWGの文字が掲げられていた。講演が終わってビルの入り口で先生と、記念撮影したとき「私は断ったんだけどね」と少し照れながら話してくれた。

20代の頃に読んだアラスカ物語から30余年を経て、目的の多くは植村直己さんが遭難した、北米最高峰マッキンリー山を間近に見る事であったが、神秘的なオーロラの光を見、また極北のアラスカで活躍している、日本の人達に出会えたことは、自分にとっても収穫だと感じています。温暖化や北極圏に興味のある方は、赤祖父俊一著「北極圏のサイエンス」オーロラ、地球温暖化の謎にせまる・発行所誠文堂新光社をお勧めします。